

# 苑路を照らす燈籠(修学院離宮)

栞「其の十五」で桂離宮の燈籠を紹介しましたが、今回は修学院離宮の燈籠を紹介します。修学院離宮は江戸時代初期に、後水尾上皇が造営された山荘です。造営当初は下離宮と上離宮のみでしたが、現在、下離宮、中離宮、上離宮の3つの離宮からなっており、それぞれの御庭の規模や姿に合わせて燈籠が10基配置されています。これらの燈籠は、様々な形状をしており、電灯の無い時代には、機能的な面においても重要であったことはもちろん、庭園の一部としてもその景観を構成する重要な要素であったことが見受けられます。



上離宮景色 観



中離宮景色 観



下離宮景色 観

## ◆ 下離宮の燈籠

下離宮には、袖形燈籠(写真：下段左)があります。非常に珍しい形をしており、別名「わにぐち鰐口燈籠」とも呼ばれています。基礎と笠の間の火袋・中台・竿を兼ねたものをコの字型にくり抜き、その天井の掛け金具に釣燈籠を吊して使用します。御所・離宮では修学院離宮でのみ見ることができる燈籠となっています。それ以外にも、朝鮮燈籠(写真：下段中)や檜形燈籠(写真：下段右)が配置されています。朝鮮燈籠は、竿や中台が大きくがっちりとした

印象を受ける燈籠ですが、傘の上にある宝珠が切<sup>きりこ</sup>型(立方体の角を切り取った形状)になっており、独特な雰囲気があります。檜形燈籠は、火袋に月形、丸、二つの並んだ方形の窓がデザインされ、笠<sup>いりもやづくり</sup>の形が入母屋造となっているのが特徴です。



a 袖形燈籠 観



b 朝鮮燈籠 観



c 檜形燈籠 観



## ◆ 中離宮の燈籠

中離宮には生込燈籠（写真：上段左）があります。竿を直接地面に埋め込んでいる燈籠で一見シンプルに見えますが、地面に埋め込まれている竿の形が単純な角柱ではなく地面に向かっていくほど太く



d 生込燈籠（客殿前庭） 観

なっているのが特徴です。楽只軒前庭（写真：上段右）では、石橋を渡る人のために、火袋が輪形の特徴的な燈籠がひっそりと建てられています。



e 楽只軒前庭の燈籠 観

## ◆ 上離宮の燈籠

上離宮には、山寺燈籠（写真：下段左）や崩家形燈籠（写真：下段右）などがあります。山寺燈籠は隣雲亭の側にあり、火袋や笠は丸みを帯びた形で、それに合わすかのように四脚の脚が開いており、面白いデザインの燈籠です。また、崩家形燈籠は、止々斎跡地の前にある浴龍池の御舟着の近くに配置され、笠が屋根のような形をしており、「舟見燈

籠」と呼ばれることもあったようで、こういった名称から当時の情景を思い浮かべることができます。

上皇がお越しになっていた当時は燈籠に火を入れ苑路を照らし、幻想的な風景を楽しまれていたことでしょう。これらの他にも魅力的な燈籠が配置されていますので是非、修学院離宮の参観にお越しいただき実物をご覧になっていただきたく思います。



f 山寺燈籠 観



g 崩家形燈籠 観

## ◆ 燈籠配置図

修学院離宮に配置されている燈籠の位置を示しました。今回紹介した燈籠は赤丸（a～g），紹介することができなかった燈籠は青丸となります。



### 下離宮

- ① 御輿寄
- ② 寿月観

### 中離宮

- ③ 楽只軒
- ④ 客殿
- ⑤ 松並木

### 上離宮

- ⑥ 大刈込
- ⑦ 隣雲亭
- ⑧ 万松塙
- ⑨ 千歳橋
- ⑩ 楓橋
- ⑪ 窮遠亭
- ⑫ 土橋
- ⑬ 御舟着
- ⑭ 西浜



## 花ごよみ ～紅葉～

御所・離宮には多種多様な樹木や花々が植えられています。季節毎に可憐で美しい花を咲かせ、新緑や紅葉など、四季折々の違った表情を見ることができます。花ごよみのコーナーでは、そんな御所・離宮の美しさを織りなす樹木や花々を順次紹介していきたいと思えます。



京都仙洞御所 紅葉橋（中央）を望む 観

### ◆ 各所の紅葉

御所・離宮には秋を彩るイロハモミジやオオモミジが植えられています。特に、京都仙洞御所と桂離宮にはモミジが多数植えられている「紅葉山」があります。さらに、京都仙洞御所には北池と南池を結ぶ堀割に架けられた「紅葉橋」（[菜其の三](#)）と呼ばれる土橋があり、その名にたがわず非常に美しい紅葉が広がっています。その年の気候によって色づき始める時期や見頃に変化がありますが、例年11月下旬から12月上旬にかけて見頃を迎えます。また、見頃を迎えた紅葉だけではなく、木から散り敷いた紅葉も、自然の芸術作品として参観者の方々を楽しませています。



京都御所 御内庭 通



修学院離宮 浴龍池北西から千歳橋を望む 観



桂離宮 表門から御幸門を望む 観